もう一度、会いたい

長崎の宝を日本の宝に

嘉勢照太さん

県指定無形文化財「長崎刺繍」技術保持者の嘉勢さん

長崎刺繍の伝統技術を継承する嘉勢照太さんを七年ぶりに訪ねた。

ご自宅に上がらせていただくと、一面に刺繍が施された深紅の打掛が目に飛び込んできた。オペラ「蝶々夫人」の舞台衣装をイメージして制作したものだという。「長崎刺繍を継承するためには、なによりも理解者を育てることが必要だと感じ、二十二年前に妻が塾長となって『長崎刺繍 再発見塾』を立ち上げました。塾生たちが腕を上げた今だからこそ、大きな仕事ができると考えて挑戦したのが、この蝶々夫人の打掛です」。長崎刺繍といえば、長崎くんちの衣装と思われがちだが、「長崎の顔」ともいうべきこうした作品を残すことで、長崎刺繍の新しい展開を図りたいとチャレンジしたという。蝶々夫人のストーリーにちなんで蝶々、桜、ソテツなどがデザインされた見事な打掛は、嘉勢さんご夫妻を中心に、約二十五名の塾生たちが八年の歳月をかけて完成させた。妻の路子さんは「刺繍の一つひとつに、針を刺した人の物語があること、これが長崎愛にあふれた人たちによって作られたことを知ってほしい」と話す。

嘉勢さんは長崎刺繍を継承する唯一無二の存在だ。現在、後継者候補はいるものの、嘉勢さんはもろ手を挙げては喜べないと複雑な心境を語ってくれた。「この仕事は欲得ではなく、何より長崎が好き、くんちが好き、伝統を守りたいという強い気持ちが大切です。仮に、そうした若い人たちが出てきたとしても、刺繍だけで食べていくのは残念ながら難しく、安易にこの道を勧めることはできないと考えています」。

この状況を打破するためにも、嘉勢さんは長崎刺繍を継承しようとする若者たちが才能を伸ばせる環境が作れないかを模索していた。「今後は、工芸に特化していきたいと考えています。くんちだけに頼っていては、伝統は失われていきます。長崎刺繍を長崎の工芸として全国の人に知ってもらい、普遍的な価値を作りたいのです。ひいては、それが長崎刺繍の伝統を守ることにつながると思います」。

嘉勢さんが針を持たない日はない。旅行どころか映画でさえ「時間がもったいない」と言い、針を握り続ける日々。しかし、嘉勢さんはそれが辛くはないと話す。なぜなら「刺繍の中に、遊びも冒険も楽しみもある」から。職人の魂というものは、なんと尊いのだろう。

膨大な時間をかけて制作された
「長崎刺繍 衣装（マダムバタフライ オマージュ）」（写真は部分）。
長崎の新たな宝が誕生した。

過去の嘉勢さん紹介号！
ni-ko-ri
No.39

どんな時も二人三脚で歩んできたお2人。嘉勢さんは「一番厳しい目で見てくれて、本当のことを言ってくれるのは妻だけ」と路子さんに絶大なる信頼を寄せている。